

## 1. 研修会から想起されたこと

研修会で発達障がいの具体的事例、当事者には社会や環境はどのように捉えられているか、ご紹介いただいた。

障がい、特に発達障がいのために社会生活に困難を感じる子ども、学生、大人の総数は、かつてから変化がないのかもしれないが、発達障がいへの理解や社会的認知が進みつつあるためか、以前より当事者が表に現れているように見える。

例えば私が大学生時代に、今にして思えば発達障がいを抱えて、他者とのコミュニケーションが難しい同級生がいた。しかし、当時は当事者の性格や考え方に問題があるのであって、周囲の人間は「あの性格は何とかならないのか」と本人に成長や変化を求めていた。その人は共同作業の際に問題行動・問題発言が多く、本人に指摘すると「これではいけないのはわかっているが、どうしたら良いのかわからない」という。学力や実務能力は高いのに、いわゆるコミュニケーション能力は低く、そのアンバランスさに本人が「私は能力があるのに周囲に認めてもらえていない」と自意識や自己肯定感を歪ませていたようにみえた。結局、解決のできぬまま卒業を迎えたが、そもそも「解決」とは何だったのだろうか。問題のある性格や考え方は変えられる、変えるべき、と我々は考えがちではないだろうか。

発達障がいまで行かなくても、我々は自分の性格に多かれ少なかれ変えたい部分があることが多い。人見知り、大雑把すぎる、調子に乗りやすい、見通しが甘い…それが社会生活を送る上で実質的な困難を引き起こすものでなければ、私たちは「できれば変わりたい、変えたい」と思いながら、変わらない・変えられないまま過ごしていく。発達障がいの者に対して「変わりなさい」「変われないあなたはダメなのだ」と矯正を押し付けるのは、考えてみればおかしい話であった。

## 2. 最近の身の回りのことから

教育は常に子どもにより良い変化（成長）を求めるので、「今のままではダメだから変わらなさい」と変化を強要しがちである。

私の周りに、発達障がいの成人（障がい者雇用で働いている）や子ども（知人の子どもや我が子の同級生で、特別支援学級で学習している）がいる。みな明るく社交的であるのは、生来の性格のほかに、親や家族が幼少期より「あなたはそのままが良い」と本人の個性を肯定しながら関わってきたためのように見える。身体障がいを含む障がい全てに言えることだが、障がい者の生きやすい社会は健常者も生きやすい社会であろう。「あなたはそのままが良い」と矯正を強めない教育は、障がいを持つ／持たないに関わらず、子ども達が幸せに育つ教育のあり方のひとつである。

## 2. 学生の修学支援にむけて

現在、社会ではコミュニケーション能力や協働作業に秀でた人材が求められ、大学でもそのような人材育成が進められている。授業においてもアクティブ・ラーニングの導入が盛んで、「自分はコミュ障（コミュニケーション障がい）なので」とそういう活動でうまく振る舞えないことを自嘲する学生もいる。

社会ではその一方で多様性を認めることが唱えられているのに、人見知りの人間や無口な人間には居場所がないかのような風潮がある。コミュニケーション能力に秀でなくても、本人がそれに満足していて障がいを感じていないなら、そのままでも十分にも思える。ただし、人は不本意でも他者と協力して物事を遂行せねばならないときがある。また、成功体験を積むことで、他者との関わりの喜びを知り、積極的に他者と関わっていくように行動が変化することもある。

週に1コマあるいは2コマの授業で接するだけの学生に対しては、なかなかきめ細やかなフォローは難しいが、矯正ではなく、当事者と私たちが幸せに共生できるような支援を試みていきたい。